

第2回

湯崎知事と 「ひろしまの未来を語る」 (竹原市)

と き 令和2年11月30日(月)

ところ たけはら美術館(文化創造ホール)

目次頁

開 会	2
知事ビジョン説明	2
参加者①	5
参加者②	6
参加者③	8
参加者④	8
参加者⑤	10
フリートーク	10
閉 会	16

広島県

開 会

司会（近藤）： お待たせしました。

ただいまから「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」意見交換会、「ひろしまの未来を語る in 竹原」を開催いたします。

はじめに本日ご参加の皆様をご紹介します。

湯崎知事の右手側から、藤川裕員さんです。迫田穆成さんです。辰巳寛さんです。新本直登さんです。永福まどかさんです。

また本日は竹原市長、今榮敏彦様。

今 榮 市 長： よろしく申し上げます。

司 会： また、広島県議会議員、森川家忠様にもご出席いただいております。

森 川 議 員： 皆さん、こんばんは。しっかり知事に物申してください。知事はやさしいですから。

司 会： お忙しい中、誠にありがとうございます。

この会の模様は YouTube でライブ配信を行っております。また県のフェイスブックを通じて、ライブ配信をご覧の皆様からご意見やご感想を募集しておりますので、フェイスブックをご利用の皆様は、ぜひ広島県の公式アカウントにコメントいただければと思います。

意見交換

司 会： 続きまして、本日意見交換いただくテーマであります「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」の説明、その後、意見交換に入りますが、ここからは湯崎知事に進行役をお願いしたいと思います。

湯崎知事どうぞよろしくお願いいいたします。

湯 崎 知 事： 皆様、改めましてこんばんは。YouTube を御覧の皆様もこんばんは。

今日は大変お忙しいところ、また夜7時からということで、本当は夕食の団らん時ではないかと思いますが、こういうお時間にお集まりいただきありがとうございます。

広島県では、実は10年後の目指す姿、そしてその実現の方向性を示した総合計画になるのですが、「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」を10月に策定したところでございます。

このビジョンによる新たな広島県づくりを県民の皆様と一緒に進めていきたいと考えているところであります。そのため皆様と率直な意見交換をさせていただくことで、我々の思いだとか、また皆さんの思いをぶつけあって、ぶつけるといっても変ですが、お互い聞きあって今後の施策の展開につなげていければと考えて、この会を23市町で催させていただくことにしています。

はじめに私から、ビジョンのポイントについてご説明をさせていただきたいと思っておりますので、スライドをごらんいただければと思います。

まず策定にあたってのいろいろな背景であります。人口の減少とか、あるいはグローバル化がますます進んでいくとか、あるいはデジタル技術これはコロナもあって、すごく意識をされていますし実際に進展もしております。あるいは格差ということがより意識されています。世界ではより大きな格差が言われておりますが、日本の中でもあるのではないかと。

災害もたくさん発生しています。竹原も30年7月豪雨で大きな被害を受けております。そしてもちろんコロナもある。こんなことがある中で、今後ますます不透明な時代を迎えるというところで、このビジョンをどういうふうにするか、その中を進んでいくのかということで作っているわけでありまして。

そのためにまず30年後いろいろな分野で、こういうふうになってほしいよねという、あるべき姿、30年後にどういうふうになってほしいか、これはどんなイメージかという、これは後で御覧いただくと、ある程度お分かりいただけると思うのですが。

例えば子どもの教育でいえば、今広島県、学びの変革というのをやっていますが、それぞれの子どもの個性に応じた個別、最適な学びとか、そういうことを言っているわけですが、そういうものが提供されているというのが30年後だとしたら、30年後にそういう姿になるとしたら、そこからずっと引っ張ってきて、途中である10年後はどんな姿になっているだろうかを考えると、その10年後の姿に向かうためには、これから何をすればいいのかを定めているというのか書いているというものです。

30年後というのはあまりにも遠くて、30年後ってなかなか予測はできないのですが、こんな姿になりたいなど、ある程度抽象的な感じになってくるわけです。ところが10年後だと、ある程度具体的にも見えてくるので、もう少し具体的になっていまして、そこにどういうふうに進むのかということになっているのです。そういうふうには作ってあるのです。

総論ですね、これがどういう考えに基づいているかということをご説明いたしますと、基本理念としては、将来にわたって広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かったと心から思える広島県の実現ということで、これは実は現ビジョン、これは変わっていません。

目指す姿というのが、県民一人一人が「安心」の土台と「誇り」によって夢や希望に「挑戦」をしていますというものでありまして、仕事も暮らしも、里もまちも、それぞれの欲張りなライフスタイルの実現できるといった姿を目指していこうと書いています。これはあとでまたご説明します。

まず今の「安心」「誇り」「挑戦」ですが、「安心」の土台それから「誇り」を高めていくことによって夢や希望に「挑戦」していきましようということ。県民の皆さんの「挑戦」を後押ししていく、これがポイントの1つになっています。

それからもう一つが里もまちもと、先ほど申し上げたものに近いのですが、「適散・適集社会」のフロントランナー、「適散・適集社会」というのも後でご説明をします。

はしよって言いますと、すごく今東京一極集中って問題になっていますが、過度な集中でもなく、かといって過疎も課題になっていますが、過疎ではない、適切な分散、それから適切な集中こういったところを目指していくべきだろう。

それから施策を貫く3つの視点として、DXというのはデジタルトランスフォーメーションですね、デジタル技術を使って大きく社会のあり方を変えていこうと、そういうものを進めていこうということと、広島ブランドを強化していこう、それから生涯にわたる人材育成。つまりいろいろなことをやるにしても人は基本でありますから、いろいろな分野での人材育成という意味も含めて進めていくということが、すべての施策を貫く3つの視点となっています。

「安心」というところがどうして出てきているかということ、先ほどご紹介したバックグラウンドありますよね、いろいろな不安の要素がたくさんあるわけです。将来が見通しにくい時代になっていることがあったり、もちろん健康の問題とか年金はどうなるのだろうかということもありますし、今、デジタルがやってきていますが、デジタルが使えない人はどうなるのだとか、そこで所得の格差が生じるのではないとか、いろいろな不安が今いわれていますよね。

これは実際調査をすると、そういう不安を皆さん抱えておられる方がたくさんいらっしゃるのです。県民の生活の満足度は非常に高く、年々上がっているのですが、ただその裏には不安もある。それが今の状況です。

そういう状況を踏まえると、まずいろいろな不安を軽減して「安心」していただくことが「土台」に必要なのだろうということでもあります。

そのために、いろいろなイノベーションを起こすとか、あるいはセーフティーネットをしっかりと構築するであるとか、あるいは人材育成によって自ら力を発揮できると感じることができるようになるとか、そういったことを進めていこうということ。それが「誇り」ですが、実は広島県いろいろな強みがあります。竹原だと目の前に広がる美しい海とか、そこで取れる魚もすごくおいしいとか、もちろんすばらしいお酒があるとか、今井先生がいらっしゃるとか、実はたけのこ料理も名前だけにすごくおいしいとか、いろいろな強みがあると思うのですが、そういった強みを磨いていくことが「誇り」の高まりにもつながっていく。それによって前向きなエネルギーを得ていこうということ。それが「誇り」の高まりにもつながっていく。それによって前向きなエネルギーを得ていこうということ。それが「誇り」の高まりにもつながっていく。それによって前向きなエネルギーを得ていこうということ。それが「誇り」の高まりにもつながっていく。それによって前向きなエネルギーを得ていこうということ。

「安心」の土台として「誇り」を高めていく。そういったものを土台とエネルギーにして、「挑戦」につなげていこう。県民一人一人が、いろいろな夢だとか希望をお持ちだと思ってしまうのですが、まず、それを持てるようにするというところが「安心」「誇り」です。そういう夢や希望を持てるようにするという「安心」「誇り」を作った上で、さらに一歩踏み出す。その夢や希望を諦めることなく「挑戦」できるようにすることが「安心」「誇り」「挑戦」でありまして、それによって一人一人の実現したい欲張りなライフスタイル。欲張りなライフスタイルというのは、これも現計画から引き継いでいるのですが、仕事だけとか暮らしだけとかではなくて、仕事も暮らしもどちらも希望することが実現できる、そういう欲張りなライフスタイルを実現していこうということ。

す。

それから、里もまちもというのがあるわけですが、これもどこに住んでいても「挑戦」できるといったことを作っていく。何か幸せになるためには町を出ないといけないとか、いやいや自分は田舎にとにかく引っ込んでいるのですというのではなくて、里にいる人もまちにいる人も、それぞれが、幸せなライフスタイルを実現できるということで、魅力ある都市の形成、先ほどいった適切な集中とか集積というものを作っていく上で必要なものです。

また中山間地域、ひと言で言うと田舎になりますが、今これを新しい時代で分散が重要になってきていますから、そういった分散を実現する場としても、非常に重要になってくる。そこをしっかりと作っていく。

それから竹原のこのいちばん最後のあたりかもしれませんが、広島だとか福山という大都市ではない中小規模の都市ですが、そこでもいろいろな利便性の高い集約された機能があり、暮らしやすい環境を作っていく、そういったことを目指していこうということです。

次が新型コロナの影響になるのですが「適散・適集」といっていることの意味ですが、先ほどから出ているこの言葉、これまでとはとにかく密になることで生産性を上げていくとか、エンターテインメントみたいな、いろいろな楽しみを作っていくようなことがあったわけですが、ただそれが今回のコロナを通じて、少し過剰ではないかということが感じられるようになってきたわけです。

いろいろなリスクにさらされるとということ、このような感染症もそうですし、それだけではなくて、地震だとか災害だとかにも非常に弱い。そういった災害に襲われると、機能停止して非常に経済的にも社会的にも課題があることが分かってきたわけです。

そういったことが、このコロナで改めて危機として認識されるようになったのではないかと、それではどうなのかということである。そうだと、いわゆる三密ですね、密集、密接、密閉を避けて分散をしていくことも非常に大きな価値だということが、改めて認識をされるようになったわけでありまして、開放的で快適な環境は、もともとこれは人間らしいではないか、あるいはそれを実現する上で、まさに今デジタル技術が、時間とか空間を飛び越えていろいろなことができるということです。

これまでは、東京にいと営業もすごくやりやすいです。お客さんがすぐ近くにいます。いまやデジタルでやりますから、電車で30分かけて行くよりも、デジタルでパッとミーティングをやったほうが、これはゼロ分で相手に届く、こういうことができるようになったということです。

一方で人と人が実際に会って話をするとか、これは無駄話も含めてよくありますよね、いろいろな仕事で無駄話の中で生まれますということがあるので、人と人が実際に会うということも重要なところがある。それは知の集積とか知の集合というふうに、イノベーションの中ではどう作るかという中では言いますが、そういったものも必要だと、ただそれも過度になると意味がないということです。

それで適切な分散、適切な集中、過疎でもないし過密でもない。一定の集中は必要、でもそれは適切。一定な分散は必要、でも過疎というものではない。それをうまく組み合わせた「適散・適集社会」を作っていく必要があるだろう。そう見たときに、広島県を見ると大きな都市がある一方で、そのすぐ近くに非常に豊かな自然がある。そういうものがありますので、まさに「適散・適集社会」を実現する上で、すばらしいベースになる環境があるのだろうということで、時間や場所に捉われない自由度、満足度の高い暮らし方と働き方ができる「適散・適集社会」を作っていくと考えているわけです。

それではそれをどう実現するかということですが、先ほど申し上げた3つの視点があります。一つがデジタルトランスフォーメーションとあって、デジタル技術を活用すること、それから広島のブランドを強化して、それを国内外の皆さんと共有して、共感をしてもらおうということ、それから人材育成ということになってくるわけです。

それを17の分野に分けて、今取り組みを進めようとしています。こちらにある17の分野、これがそれぞれ相互に関連していきますので、それが相乗効果を生みながら、県民の皆様、一人一人の新たな挑戦を後押しするような、そういった取り組みにつながっていくように務めていきたいと考えているところです。

例えば、それぞれの分野で、どんなことが言われているか具体例を眺めてみますと、子ども・子育ての中では目指す姿は、すべての家庭を妊娠期から子育て期まで、切れ目なく見守り支援する、ネウボラの拠点が全市町に設置されて、子育て家庭に係るすべて

の医療機関、保育所、幼稚園などと連携して、子どもたちを多面的・継続的に見守ることにより、必要な支援が届けられています。

行政用語ばくなっていますが、こういったことが10年後には実現しているということを目指していこう。指標としては、安心して妊娠、出産、子育てができている、そういうふうになっている割合が、10後には91%、現状は80%ぐらいなのです。80%結構高いと思うのですが、まだ2割の方がいろいろ子育てに不安をもっていることがあるので、安心して子育てできると思っている方が91%になる、そういうことを目標にしています。

そのための取り組みの方向として、下に1、2、3、4、5、6と書いてありますが、妊娠期から切れ目のない見守り・支援が充実しているとか、子ども居場所がしっかりとありますとか、あるいは児童虐待防止対策がしっかりとしていますとか、そういったことを指標もおきながら実現していこうとなっているわけです。

同じように教育の場合、こういうふうにも子どもが育つ環境に関わらず、幼稚園、子ども園という幼児教育から、これはベースは幼児教育のところを出しているのです。という目指す姿がありまして、それにもなう指標があるということです。

次は観光の例も出ていますが、こういったことを、それぞれの分野で細かく定めているというのがこのビジョンであります。

ただ、これは行政が作ったもので、行政がこういうふうになりたいという絵姿を書いているのですが、実は実行するのは行政ではなくて県民の皆様なのです。つまり行政がこれを実現できるわけではないです。もちろん行政がやる部分もあります、教育とかだと、かなり行政が関わってくるのですが、例えば経済とかになると、かなりの部分はどちらかというと県民の皆様が実現することでありまして、そういう意味では行政は後押しをしていく。

でも県民の皆様も、それぞれ思うことは違いますよね。本当はそれが実現できるようにするというので、バラバラでいいのですが、目指す姿、例えば子育てについての考え方だとか、今あったようにみんながいろいろなバラバラに考えていたら、どこにもいかなないということになるので、何か姿を示す必要があるだろうということで、姿を示す役割として今行政がやっています。そこにいかに多くの皆様に共感していただいて、先ほどの子育ての例ですと、医療機関とか保育所、幼稚園とか地域子育て支援拠点とか学校と連携していますということは、そういったところで働いている皆さん、あるいは保護者の皆さん、そういった皆さんと協力をして、これを実現していきましょうということで、いろいろな意見はあるかもしれないけれども、こういう姿っていいよね、そこを目指していきましょうと、そのためにも行政も頑張るし、県民の皆さんもご協力いただきたいと、そういう計画になっているとご理解いただければいいと思いますし、そういう意味では県民の皆様にご理解をいただきたいとか共感をいただく、そこに協力していただくことが非常に重要なものであると我々は思っているところでございます。

ということで、最初に戻るのですが、こういった会この計画ってどんなものなのかは、なかなかお伝えしていくのは難しいとか大変なところもありまして、今回こういった試みを、全23市町でやってみようと、やらせていただいているところであります。

以上が私のこのビジョンのご説明でございます。

それでは続いて意見交換に入らせていただきたいと思います。はじめに参加者の皆様から、お一人ずつ5分程度でご意見、ご提案、ご発言をいただきまして、皆様のご発言一巡したら、残りの時間で全員での意見交換をさせていただきたいと思います。

せっかくこういうものも作っていますので、座ったまま、ご発言いただければと思います。

それでははじめに、順番ご指定させていただいていると思いますが、藤川さんからお願いでよろしいでしょうか。

参加者①

藤川： こんばんは。竹原市で床屋をしております、藤川と申します。

僕が気になったポイントが2つありまして、教育の中で主体的な学びが定着している児童・生徒の割合、これをどうやって10年後に80%に持っていきのかなというところで、主体的な学びが定着しているというのはどういうことなのかなと、いろいろと調べて僕なりに勉強したのですが、その中でインプットとアウトプットというところで、日本はどちらかというとインプット型の教育だと思うのですが、それをアウトプットする場は、いつどうやって設けていくのかというところで、町のイベントとかよく携わるこ

とがあるのですが、その中に僕たちができることは、学生・児童たちを巻き込んでいってあげて、ともに大人と子どもが手を取り合って、一緒に学んでいくのが理想なのではないかと思っております。

2つ目が、スポーツについてなのですが、各地域に根付いているスポーツという面で、知事もご存じかと思いますが、竹原には広島県で唯一、相撲部があります。

歴史を見てみると、結構昔からやっていることもあって、今は途絶えたりすることもあるのですが、お隣の安芸津からは力士が出てという状況。相撲部が頑張ってくれている中で、地域がそれを応援できているかどうかというところと分らないです。

お客さんに聞いても相撲部があること自体知らない方が多い。竹原高校、市役所に横断幕がかかっていますが、それでも認知度が低い。そこをもっとアピールできればいいのではないかなど、相撲の町とすると難しいかもしれないので、相撲のある町として竹原は押していけば、地域の活性化にもつながるのではないかといいところがあります。

相撲部全国大会にも出て優勝する子たちもいて、すごく誇りに思える部分も多々あると思うので、そこをもっとプッシュしていってもらいたいと思います。

もちろん相撲を通して教育にも落とし込めると思うので、道徳教育の一環にもなり得ると思うので、竹原がそこをしっかりと引っ張っていければいいのではないかと僕は考えます。

それなので2つともに共通して、相撲にしてもPRの場をいつ設けるのかというので、今はなくなってしまったのですが、商店街だと駅前の商店街があるのですが、そちらでえびす祭りというのが近年まで開催していて、過去にはそこで奉納相撲をやっていたという歴史もあります。

それを今一度、広く伝えていければいいのではないかと思います。そこには竹原高校の相撲部の子どもたち、道場に通っている子どもたちを招いて、奉納相撲という形をとらせてあげること、地域の人々に見てもらうことで応援してくれるのではないかと、スポーツを通して地域の活性化の終着点、市民みんなが相撲部を応援できる形が、終着点ではないかと僕は考えるのです。

その辺で他方から相撲をしたいという子、今年広島市から角界に入った中学生の男の子もいらっしやいます。

そんなふうには、いろいろな方面から出ていっているの、そういった子どもたちが竹原に安心して通える、住めるような環境を準備してもらえると、誇りを持って挑戦しているのではないかと僕は考えているのです。

そのための土台は、いろいろな方々が準備していると思うので、竹原市においてはそれをバックアップしていただきたい、広島県においてもそれを大きくバックアップしていただければ、いちばんいいのではないかと思っております。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

誇りを高めるというところと人材育成のところですね、そこについての課題意識をお話いただきました。

それでは、続いて迫田さんお願いしてよろしいでしょうか。

参加者②

迫田： 大きな声のでるかもしれませんが、グラウンドでしか声を出していないのですみません。

この会に出るといって今日も5時まで知らなかったのです。娘から電話がかかりまして、「何」と言ったら、「今日6時45分には行かなければいけない」と、「どこへ」と言ったら、こうこうで「5人のうちの1人に入るので行かないといけない」と、本当に申し訳ございません。

今、私が家で言っていることを、娘は言ったらどうかと言っているのではないかと思います。

現在竹原高校の野球部の監督をしております。6才の時に原爆を受けて今81ですから、いいかげんな年なのです。今、部員が10名なのです。なんとかこれを3年のうちに50名にして、甲子園を狙えるくらいのチームにしたいと、そうしたら町ももっと活気づくのではないかといいことで、頑張っているのです。

ここは陸の孤島で、東広島から帰るのにバスがないのです。呉から呉線が1時間に1本で1時間かかるのです。そうしたら寮生活する形で今年も6名が入れるような寮をお願いして作っていただいて、これは保護者の方に任意でやってもらったのです。明日もお会いしまして、1つ寮をと考えていただいているのです。

そういう形でやったときに、私の計画では3年後には選手50名にして県内ベスト4、県内ベスト4に入れば運が良ければ甲子園も狙えます。そうしたときに竹原市民の方の考え方とかなんとかも、もっと違うのではないかと、それは私1人でできることではないので、どうか竹原市民の方もひとつ協力してほしいなど、そういうことを娘が今日言いなさいと言って、この会に出したのではないかと、私、全然知らなかったのです。

だけど、自分としては気が付いたら野球をやっている、それからずっと野球で、結局何が良かったかという、私はマイナス思考がないのです。それは野球をやっているから、マイナスがあったときに自分で神様が嫌がらせをしているな、これできっと頑張れば甲子園へ連れて行ってくれるのだと、これでやっているから嫌なことがあっても自分がそれでめいるとか、これは難しいとか考えたことがないのです。私にとって野球はすごくいいものを持っています。

今、何をいちばん考えてやっているかといいますと、保護者の方に喜んでもらえるような子どもを作りたいということで、子どもをどうだこうだというのではなくて、本当に保護者の方が子どもがこんなになったのですと、中にはあるのです。「監督さん私がこんなことを言ったらおかしいかもしれないが、うちの息子の成績が上がってきたのです」と、私もそういうことを言われると、すごくうれしいですね。成績がうんぬんではないのです。

私は勉強したことがないもので、成績のことを言われるとかえって困るぐらいなのですが、ですが子どもが一生懸命やって、そして世間に出たときにはじめて、あなたはいい子ですねと言われるような子どもになってほしい。そのためには、今は子どもが少ないので大事に育てられているから、お前これは駄目じゃないか、行儀が悪いじゃないか、こういうことをしないといけないではないかと大変なのです。

ですが、子どもが変わってくると保護者の方も変わってきますし、今はものすごく学校のいわゆる役に対して全面的に協力をしていただいております。

私は野球部だけをどうこうか思っていないです。ほかのクラブもそうですし、いろいろな形で学校がはやってくるような、今聞きましたら人口が2万6,000ですか、これが少しでも増えていくような形、それにはみんながやるきになって、何とかしようではないかという気持ちを持たないといけないのではないかと思うのです。

私が偉そうに言うような、今回出ることも分からなかったくらいの男が、そんなことを言ったっておかしいのですが、それでも私としたら一生懸命やって、子どもが喜んでくれる形になって、親御さんがもっと喜んでくれるれば、これは絶対に町が活気づくのではないかと、まして50名の野球部がウロウロするようになれば、皆さん方も声をかけていただくと思うし、今は市民の方にもだいたい覚えていただいて、私らのときは監督、私はチアリーダーですからねと、今現在1学年が2クラスしかないのです。男の子が何人ですかと、30人いないのです。6名入ってくれたのです。6名入ってくれたら5分の1以上あるわけです。

これはなんとか違った形で、どんどん怒られるとかなんとか、この年になって生徒を殴ってとか怒ってとかは絶対ないです。生徒が少しでも喜んでくれるような形をとる。

この年になってメールですね今、これがいちばん話が早いのです。今の子どもは、少し話をして、お前どうこうと言ったら、言葉が出ないのです。良いか悪いかだけ聞いているのだと言っても、後になって監督、僕は人から問われるとどもるのです。言葉が出ないのですということ言われている。

とにかく竹原の方で、一つでも野球を強くしてやろうという気持ちを持っている方は、どんどんグラウンドに来ていただいて、励ましていただきたいと思います。

変なことを言って申し訳ございませんが、そのつもりでやっていますので、よろしく願いいたします。

湯崎知事： ありがとうございます。

迫田さんというか、迫田監督と呼ぶべきかもしれませんが、広島県の野球界をずっと引っ張っていただいた。広島出身の野球選手はなんでこんなにいっぱいいるのだろうかというぐらいいますが、すばらしい競争環境の中でこうなっているのではないかと思います。今日はご出席ありがとうございます。

それでは引き続いて、辰巳さんお願いいたします。

参加者③

辰 巳： 辰巳と申します。よろしくお願ひいたします。

私は自分の経験を基に健康分野についてのお話をさせていただきたいと思います。

私は今46歳なのですが、40歳のときに転職をいたしました。その事業所で人生で初めて受けた健康診断で大腸がんが見つかりました。

それまでは両親と自営業をしていたので、健康診断を受けたことがなく、ちょうど手術を終えて帰ったら、デーモン閣下の写真が入ったはがきが家に届いていて、これは自分は転職していなかったら、受けていなかったかもしれないと思いました。ということは、もしかしたら今ここに生きていることがなかったかもしれないと実感をもっております。

自分の周りの方の誰よりも元気だと思っておりましたが、そういったことがありまして、約5年経ちまして、自分の生活を見直していく中で、だんだん再発とか転移に対する恐怖も薄れつつある、前向きな人生を今、送れているのかなと思っております。

広島県では先ほど申しましたように、デーモン閣下を起用して他の県にはない独自の広告展開をされていると思うのですが、現状を見ますと、検査を受けていらっしゃる人が少ないなど数字を今日見受けましたので、企業に勤めている方は健康診断が義務で、毎年きちんと受けられていると思うのですが、自営業の方、中また小企業の方はなかなか平日に時間を作ることが厳しかったりして、また年齢も若ければ大丈夫ではないかという感じで、健康診断を受けない方が多いのではないかと思います。

勝手なアイデアを申させていただきますと、例えば月に1度は日曜日に検査を受けられるような病院を紹介してあげたり、自営業の方が平日受信されたら、商品券なりクーポン券をあげますよという感じで、受診率を上げる取り組みをしていただけたらいいのかなと思っております。

この11月から献血の要件が緩和されまして、私みたいな、がんを経験した人間も5年経過して状況がよければ献血ができるとなりましたので、早速11月になって、8年ぶりぐらいに献血をしに行ったのですが、今、献血は困っているとニュースで見ることがあります。献血に行くと、もちろん感謝されるというありがたいこともあるのですが、血液の状況をチェックして、はがきが送って来たりします。一石二鳥で非常に良いのではないかと思いますので、献血の啓発活動も含めたことをしていただいて、私たち世代がまだまだ消えてしまっただけではいけないと思います。迫田監督みたいに長生きして、広島県のため竹原市のためにも、これからも頑張っていきたいと思っておりますので、広島県として健康寿命を延ばしていくような施策をしていただければと思っております。

私の意見は以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

ご自身のご経験も共有していただいて、ありがとうございます。

それでは続きまして、新本さんにお願ひいたします。

参加者④

新 本： 新本と申します。よろしくお願ひいたします。

今回のこの催しを知ってチャンスだと、ぜひ知事に聞いていただきたいことがあると思ったのですが、よくよくテーマを見ると「未来を語る」となっていて、私の年で未来を語るというのはふさわしくないと思っていたのですが、ある方にポンと押されて大丈夫と言っていたので、思い直して今日お話をさせていただこうと思います。

私は今、地元大久野島の毒ガス製造の歴史を伝承すべきだということで、島内を巡りながらご案内をしております。合わせて広島市の被爆体験伝承事業がありまして、そこで被爆者の方の証言を引き継ぐための活動もさせていただいております。

迫田さんも被爆されたということですが、広島県内にはたくさんそういう方がいらっしゃるのですが、なかなかこういう事業に出向かないと、そういう活動ができないというところがありまして、今やっているところです。

広島県において、数年前でしようか国際平和拠点ひろしま構想というのを打ち出されました。私がこの構想を知ったときに、これは忠海でぜひ頑張れということだと勝手に思い込みをしました。

私の中で、広島県で戦争とか平和を考えるというのは、もちろん小さい時から平和学習とかで、原爆のお話はずっと勉強してきましたが、地元にある負の歴史、大久野島の

毒ガス製造の歴史を合わせて考えることがないと、本当の意味での平和を求めることにならないのだと確信のようなものがあって県の構想を知って、これはチャンスだと思いました。いずれ原爆はもちろんです、化学兵器のことだとか、そういったことをすべて含めた形での平和拠点という動きになるのだと思っておりました。

よく一般的に戦争のことを考えるときに、加害とか被害と構図で表現されます。国際法違反の毒ガス製造は加害という側面が強いものですから、真正面から取り上げられることはどちらかというとき少ない。

8月になりますと8月ジャーナリズムとか言われますが、そういった加害の責任がどうだとかという論調が目立つことにはなりますが、一過性といいますか、いつの間にかしぼんでしまう。

私がどうこうではないのですが、むなしいといいますか、こういうことでいいのだろうかという思いをいつも感じているところです。

そういう私ですが、ときにはアジアの国々の方をご案内することもあるのですが、毒ガス製造の歴史をお話をするときに、私の中で大変複雑な思いがあり、それをまず整理をしながらちゅうちょもあるのですが、でも逃げてはいけません。こういう問題を真正面から向き合って日本人としてお伝えをして、こういうことを考えているのだと伝えたいということで、言い聞かせて活動をしているという実態があります。

そういう中で、今日はぜひ知事に聞いていただきたいというか、国際平和拠点ひろしま構想というビジョンを私1人が具体化できるわけではないのですが、ここ竹原でどういうふうに展開されるのだと考えてみました。

改めてこの構想を読ませていただくと、当然のことなのですが、核兵器廃絶に向けた取り組みを中心に描かれていて、そのことについては何の異論もないのですが、先ほどのような私の思いからすると、こういった構想とかガイドラインを策定されていますが、やはり毒ガス、いわゆる化学兵器に関連する事柄がもう少し具体的に、平和ということを考えるときに掲げられていてもいいのではないかと思います。

とりわけ読ませていただくと、先ほどの話ではないですが、10年後の目指す姿の中に、平和に関する資源の集積機能の確立とうたわれています。そういう意味でも原爆はもちろんです、化学兵器に関連するいろいろな情報を集めて発信していくことが大事ではないかと思えます。

翻ってふるさとを考えてみると、原爆被爆と同じように高齢化がどんどん進んで毒ガス製造の記憶が、亡くなられるという形で消えていくし、大久野島に残っている関連遺跡なども、例えば原爆ドームのような補強、メンテナンスがされていないわけで、いずれついで去っていく。そういう意味で緊急の課題で、もう待てないというのが私の実感なのです。

ふさわしいかどうかは別にして、私の思いとすればビジョンに明確に掲げていただくことで、その重要性を再確認することにつながるし、そして我々、個別の取り組みもそうですが、そういったものが真価されていくのではないかと思います。ぜひその辺りの知事のお考えとか思いを聞かせていただけたらと思います。

単にお願いに終始するだけではよくないと、先ほどのように私の中では歴史の検証すべく活動しておりますが、これから例えば、1つは限られた資料を再調査して毒ガス製造の歴史を分かりやすくまとめていきたい。2つ目は毒ガス、原爆を合わせて広島平和を考えたい訴えたい。3つ目は語り部の養成の取り組みを目指したい。

知事からは欲張りなライフスタイルをとということですが、私は身の程をわきまえず大変欲張りなので、あれもこれもということですが、ぜひそういったことについて、後押しをしていただきたいと思えます。

すみません、もう少しだけお許しいただけますか。

考えてみますと、竹原市には理論物理学者の三村剛昂さんという方がいらっしやって、戦後、昭和38年に湯川秀樹さんとか朝永振一郎さんが参加されていた、科学者京都会議が開催された土地柄でもあります。

大久野島には実は毒ガス施設に限らず、日露戦争でロシア進行想定した芸予要塞を築かれた。これは広島湾岸にたくさん残っていると思うのですが、そういった形で資産があります。

私の思いとすれば広島、呉、竹原に横串を刺す。この前の三次のミーティングでもお話ありましたが、そんな形はどうかと思います。

先日、広島市の企画だと思えますが、ピースツーリズムのモニターツアーというのを

やられまして、私ご案内しました。大久野島、毒ガス、大和ミュージアム、原爆を巡るというお話でした。

ぜひそういったことで、シンボル性豊かな資源がたくさん竹原にあるので、それをどんどん串刺ししていただいて、そこを我々がごそごそ動くという活動になれば、きっとこのビジョンが具体化していくのではないかと思います。

すみません長くなりました。以上でございます。

湯崎知事： ありがとうございます。

誇りというか、その裏腹にあるものだと思いますが、地域の歴史だけではなくて、これは世界史にもかかるといって、そういうこともしっかりと記憶にとどめていこうというお話だったと思います。

それでは続いて永福さんお願いします。

参加者⑤

永 福： 永福です。よろしく申し上げます。

皆さんが話し上手なので困っておりますが、頑張って発表させていただきます。

私は教育について知事にお願ひがありまして、この場へ出させていただきます。

グローバル社会へ移りゆく中、教育ではグローバルな人材の育成に取り組むことが必要ではないかと思っております。

県立学校では諸外国の学校と姉妹校提携をされていると思うのですが、市町立の義務教育学校では乏しく、今後はあらゆる小中学校で、国際的な視点からの環境づくりが大きな課題となっていくと思うのです。

息子が通っている竹原の忠海学園では、グローバル、世界、ローカル、地域を掛け合わせた言葉になるのですが、グローバルスクールを目指しています。国際的な視点に立って人材育成する教育活動を進めていきたいと考えております。

ぜひ支援していただきたいことがあります。取り組みとして、県内のすべての学校に姉妹校提携を推進していくことと、広島グローバルアカデミーとしてある叡智学園との交流や研修会をしていただきたいと思っております。

私は今、忠海学園の学校運営協議会の一員として、PTA会長として忠海学園がグローバルスクールとして発展できるように協力していきたいと思っておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。以上です。

湯崎知事： 分かりやすく発表いただきまして、ありがとうございます。

教育の中ではグローバル化という、先ほどの私の説明の中でも、背景の大きな要素の中に、グローバル化が進んでいくということがあると思っておりますが、それに対応することができる子どもたち、小中学生の段階からしっかりとということですね。

して、共に考えていけばいいのではないかと考えております。以上です。

フリートーク

湯崎知事： 皆様、本当に貴重な意見をそれぞれいただきまして、ありがとうございます。

藤川さんからは、伝統ある相撲部、子ども相撲もありますよね。土俵もあって、子どもたちが相撲をやるという伝統があるかと思いますが、その伝統を活用して、子どもたちの教育につなげていく、また地域の活性化につながっていくということ、人づくりとか地域の活性化につながるのかなと思います。

今、広島県ではスポーツが持つ力、これは特に地域づくりに与える力というのは、すごく大きなものがあると思っております。スポーツコミッションと呼ばれるものなのですが、スポーツアクティベーションひろしまというものを設立したのです。

元福岡のバスケのチームの社長をやっていた人に来てもらって、プロのバスケチームは特に地域との関わりを大事にしてやっていますから、その経験を活かして、スポーツを活用した地域づくりを進めていこうということで、県の施策としては、我がまちスポーツとっているのですが、一村一品運動みたいなものだと思います。そう思うのですが、一村一スポーツ運動ではないですが、そういったものに相撲も竹原はあたるかもしれないということで、ご紹介をいただいたのかなと思います。

本当に地域に与える力、それをまた市民の皆さんと一緒に作っていくと、それがまた誇りにつながっていくということで、おっしゃるとおりだと思います。

それから迫田監督ですね、本当に 81 におなりになられたのですよね。ずっと野球に関

わられて、竹原でも人数の少ない高校でなお甲子園に出るという夢が実現すると、本当に子どもたちに与える影響は大きいと思いますが、私は出なくてもその姿勢は大きいと思うのです。まさにスポーツを通じた、今度は教育的観点、人材育成というよりは人間形成ですね、その大きさを本当にこれまで実践されてきて、実現されてきたということだと思います。それをまた地域との関わりをどういうふうに作っていくかということかと思ひます。

今の藤川さんのご意見とも重なるところがあるわけですが、スポーツをどういうふうに、うまく地域の力に変えていくか本当に大きなテーマですし、ビジョンの中でも大きなテーマの一つとして扱っているところでもあります。

それから辰巳さんからは、今度はがん検診のお話をいただきました。これは安心▷誇り▷挑戦の安心のところにつながるのだと思いますが、まず検診を受けて安心を作って挑戦をしていこうということになろうかと思ひます。

いろいろな課題が確かにございまして、デーモン閣下のおかげで、皆さんがん検診自体は、よく御存じいただいているのですが、なかなか実際の検診に足を向けるかということ、全国に比較しても足りない。我々が目標としております、それぞれの主要ながんで50%の人が検診を、本当は50%ではなくて100%目指さないといけないのですが、まず50%とって、それでもそれすらも実現できていないということで、いろいろなアイデアもいただきました。そういったアイデアもいただいて、いろいろなことを試しながら我々も進めていくと、健康は安心の非常に大きな土台であるということ間違いないことだと思いますので、それについても、分野でいっても健康というもの、このビジョンの中で非常に大きなウエイトを占めていますので、しっかり取り組んでいきたいと思ひます。

新本さんから、この竹原の歴史というか大久野島の歴史、平和というものを考えるときに、原爆のほかにも非常に大きな学ぶべき題材として、毒ガスのことがあるのではないかと、これは本当におっしゃるとおりですよ。そうやって考えて翻ってみますと、確かにいろいろな活動支援というか、被害者の方々の支援であるとか、我々もさせていただいているところではあります、ただその伝承していくところでは、十分ではないかもしれないと改めて思ったところでもあります。

広島と呉と大久野島を結ぶツアー、それも本当に戦争の多面的な姿を学ぶことができる、すばらしい着眼点ではないかと思ひました。原爆のことは、どうしても非常に大きくなっているのですが、原爆のことを話す中でも、アジアの方々の受け止めは少し違うところがあって、我々も常にそれを感じているところですが、いろいろな多面的なことを学習しながら進んでいくということは、非常に重要だなというのは、改めて思ったところでもあります。

永福さん、グローバル教育ということで、これも非常に重要な視点でございます。教育の中でも非常に重要でありますし、グローバル人材というイメージが広島県から世界のどこかへ出ていって、何かやっている人のように思えるイメージがどうしてもありがちなのですが、広島県が目指しているのはそういうことではなくて、今コロナで観光客が減っていますが、どこにいても外国の方と、いろいろな接点を持つ時代になってきたわけです。

これはリアルでもそうですし、ましてやりモートができるようになったらまたそれがある。あるいは観光なんかだと分かりやすいですが、仕事の中でもふと気が付くと会社の株主が、どこかアジアの国になっていました。今度新しく来る社長はシンガポール人ですとか、そういうことが普通に起きるようになった。ということはどんなところでも、そういうことが必要で、それは決して語学を学ぶということでもなくて、違う考えだとか違う経験だとか、違う教育を受けた違う価値観を持った人と一緒に暮らしたり働いたりすることができるということが、グローバル化ということだと思いますので、そういう観点からはまさに幼児教育のところから、そういったことをやらなければいけないということで、幼児教育のプランから、実はそういった多様な人と一緒に協力をする力をつけていこうと、小学校、中学校もそういった観点を含めて進めているところなのです。

そうはいつても、実際にいちばん分かりやすい違う背景を持った人は外国人なので、そういった皆さんとも交流をする機会だとか、おっしゃるように姉妹提携は大事なことだと思います。これもいろいろなことを具体的には考えないといけないと思ひます。

高校でも姉妹提携をしているのですが、なかなか活動が難しかったりすることもありますから、小中学校もどういうふうにやって接点を持っていったらいいのか、しっかり

と考えていく必要があると改めて気づかされたところでもあります。

本当に皆さんありがとうございました。

市長、今こういったご意見いただきましたが、市長の方からご感想とかコメントあったらお願いいたします。

今 榮 市 長： 湯崎知事が美しく解説をされ感想を述べられたのですが、私は何を述べられるかなと思いましたが、私はこの町に住んで市長という職に就かせていただいています。今日5名いらしている皆さんは本当に地域で活躍をされている方で、その活動の一端または思いの節を述べられて、逆に私が元気をいただいていると思っています。問題提起もあるのですが、逆に言えばそこにどう取り組んでいくのかということでもあったかと思えます。

藤川さんの相撲の件は、実は竹原で相撲が有名といいますか、歴史的にあるというのは、実はその道場に私も小学校の時代通ってしまっていて、私が通う以前から歴史があった。その少し後に先ほど言いました隣町から力士が出たというのは安芸乃島さんです。私も年が近いもので非常に親近感があるし、彼が今親方になって活躍しているのは、本当に素晴らしいことだと思っております。

この竹原で相撲をどう捉えて、どう我々が支援していくかについて、指導者の皆さんが一生懸命頑張っているその姿を、できる支援または応援を市民の皆さんと一緒にしていくことかなと思っています。本当に竹原にとっては身近なスポーツですし、実は地元選出の国会議員、県議員はそれぞれ団体の県の会長で副会長でもありますので、相当な支援、思い入れもありますので、そこら辺のことも踏まえて、これから取り組んでいけたらと思います。

迫田監督は竹原においでになられたときに、いち早く私のところにもおいでいただき熱い思いを語っていただきました。今日お話しされたことが全くぶれていません。本当に素晴らしいと思えますし、逆に成果を上げてきてこれられているというのが素晴らしいと思えます。

今、まだまだ伸びしろがあるといいますか、これから監督が描いていらっしゃるのですが、どう実現していくことができるのかを、我々も一緒に考え取り組んでいければと思っておりますので、夢を与えていただき、本当にありがとうございます。

辰巳さんのがん検診の件は、数年前に竹原の医師会が主宰をして、広島大学の肺の権威である教授がおいでになって、プロジェクトXにも出られた素晴らしいお医者さんですが、来られた方がストレートに、がん検診はどのくらいの周期で受けたらいいのですかと質問をされたわけです。その時におっしゃられたのが率直に毎年受けてくださいと言われたのです。

毎年受けてくださいというのは、実は竹原市の保健師もずっと言い続けてきているのですが、彼が言うと、そうなのだとするわけです。だからデーモンさんもそうですが、そういう方が発信をしていく主張、アピールの強さをその時に感じました。折に触れて、そういうことを繰り返して受診率、受検率上げていきたいと思えました。

大久野島の件は、率直にさまざまありますが、大久野島は竹原市にとって非常に大事な資源、財産だと思っています。もちろん毒ガスの歴史や戦争に関わる遺跡の保存でありますとか、今でいえば貴重なうさぎの島として非常に皆さんに注目をいただいていますし、コロナになる前はインバウンドで相当外国人の方にもおいでいただいていたと思います。

本当に大事にしないではいけない大久野島を、今ご提案ご提言いただいた新本さんのご意見も踏まえて、これから竹原市としても取り組まないといけない、もちろん広島県の皆さんにも協力をいただきたいと思ったところです。

最後、永福さんが叡智学園のお話をされました。私先日、叡智学園に行ってきました、目からうろこといいますか、通常我々が経験してきた教育の環境とは全く違ったものでありまして、それをただちに竹原市の中に取り入れることができるかということ、たぶんそうではないのだと思うのです。

ただ教育はいろいろな視点があるし取り組み方があるし、指導の仕方があるという一つの大きな刺激を受けることができるのかなと思えました。うちの教育長もその時に一緒に行きましたので、市内の主には校長、教頭を中心とした先生方にも、ぜひそういう機会を作って、それを持ち帰って刺激を受けて、現場で取り組んでいこうということは今進めようとしているところです。

竹原市、今年からハワイの学校と連携を結んで取り組もうとしています。広島県も東京広島県人会の時にハワイと提携を結んで、いろいろな交流がスタートしているのです

が、竹原市もそういうご縁をいただいて、グローバル化の外国語ができればということではなくて、外国の皆さんの文化を、今でいえばウェブでも共有できるでしょうし、そういうことをまさに今初めようとしている。

そういうことが忠海学園も義務教育学校に今、移行してまだスタートしたばかりですが、いろいろな展開がこれからできるであろうし、我々も頑張って進めていきたいと、それを県教委と一緒に取り組んでいきたいと思っています。

湯崎知事： ありがとうございます。

ちなみに今の叡智学園の授業の印象が全く違ったというか、目からうろことおっしゃっていただいたのですが、今、実は県内全部でああなるということが目標なのです。それが学びの変革で、ただ叡智学園の場合には英語の授業もかなりあるので、そこは叡智の特別なところではあるのですが、その英語の部分を除くと授業の進み方は全部がああなる。これは学びの変革の本当の意味の姿だと我々認識しています。

学びの変革というのは何かというと、教育を根本から今変えようとしているのです。それは何かというと、昔でいうと先生が教壇に立って黒板があって、子どもたちがみんな先生のほうを向いて、そして先生の言うことを一生懸命ノートにとるとというのが従来の教育のイメージですよ。

新しい教育、この学びの変革はどういうものかということ、むしろ先生は教師ではない。教師というのは教える師ですよ、そうではなくて先生というのは、子どもたちが学ぶことを助ける人になっていく。つまり子どもたちが自ら学んだり、伸びようとする力を引き出してあげる人というのが、新しい先生の姿なのです。

ですから教育変革ではなくて、学びの変革といっているのはそういう意味で、学ぶことが中心、つまり子どもが中心になる。そういうことが学びの変革なので、授業のやり方も180度変わってくるわけです。

ところが急にそれをやりなさいといってもできませんし、どういうふうに評価するのですかと言われたときに急にはできないので、それをまさに180度変えた姿を今、叡智学園の中に作って、それをだんだんと県内のすべての学校に展開していきましょうと。

これは今、平川教育長という人がいまして元気な教育長ですが、彼女は5年間でこれを全県に展開しますと言っていますので、よし、やろうと今進めようとしているところです。そういうものであります。

これからフリーディスカッションできればと思うのですが、我々の悩みもありまして、市長も同じだと思うのですが、「こういう支援をしていただけると」とか「こういうところに重点をおいて」と、「はい、分かりました」とすぐに言えないのは、やはり我々お金がないという非常に厳しい現実として直面しているところもあるのです。ただ皆さんのそれぞれの思いとか、こうしたらいいのではないかというのは、おっしゃるとおりだと思うのです。

この問題をどういうふうに解決していくか、これ常に我々も悩んでいるところなのですが、どうでしょうか、皆さんそれについてご意見あったら、我々にも知恵を授けていただけるとありがたいと思うのですが、ちょっと大きなテーマかもしれませんが、どんなかいかででしょうか。

新本： 実は毒ガスの伝承以外にも古民家をリノベしてとか、お客様に大久野島のですよね、いろいろなことをやって欲張りなのですが、私にとっては原点になるのが知事が2014年にやられた「しまのわ」なのです。当初説明があつて補助もない何もないと言われて、ほとんどの方ちゅうちょされて撤退され、山崎さんの考え方に共鳴していて、みんなに「そんなことはない、絶対いいことがあるから、絶対やるべきだ」と言って、結局私が借りている古民家で、ワークショップまでやっていただきました。

結局これではないかな我々がやっていただきたいのは、というのはそのおかげで愛媛の方とも交流できたし、県内のいろいろな人と、のろしりレーだとかいろいろなことをやりながらつながって、今それが私の中にあつて、そのつながりを信じて頑張っているところがあるのですが、ぜひ串を刺すというのですか、そういうことをやっていただくのが、予算はずいぶんいったのでしょうが、そういった形でやっていただくことが、我々が元気になるし元気になる人間が増えれば、こういうビジョンを、どういうふうに進めていくかというときの基本的なことになるのかなと思います。

一つだけものすごく新鮮だったのは、幹部の職員さんいらっしゃって失礼があつてはいけないのですが、私が感激したという意味でお話ししたいのですが、知事が言っておられることとか「しまのわ」のことを、私が接点を持つ段階でもまだ説明しにくいとい

うか、とまどいということを感じて、やはり仕組みづくりというのはそういうことではないかなど、従来のやり方を全部取っ払って、やってみようということに我々もついていく、そういう形で、こういうビジョンは下から支えていくということになるのかなど、ぜひ引き続き、そういうことを今度は県と市も、そして我々も刺していただいて何かできたらいいかなということ、ぜひお伝えしたいと思っております。

湯崎知事： ありがとうございます。

「しまのわ」は、もうすでに6年くらい前ですか、その影響というか遺産というか、レガシーと最近は言われますが、それがまだ続いていると思うと本当にやってよかったなとか、おっしゃるとおりで地域の力をいかに引き出すかが大きなテーマだったので、そうやっておっしゃっていただけたらうれしいなと思います。

やはり地域の皆さんの活動をいかに下支えするかという、まさに子どもの学びではないですが、発揮できるように、どういうところを支えるとそれができるのかということ、やはり我々も知恵を出さなければいけないのかなと思ったしだいです。

今の点について、ほかにご意見ある方いらっしゃいますか。よろしいですか。

それからもう一つ、今の「しまのわ」のメッセージというか意図が、新本さんにしっかり伝わっていたので、私は今とてもうれしかったのですが、このメッセージが伝わるとするのは非常に難しく、例えばビジョンについても、ご理解いただくといっても非常に多岐にわたりますし、先ほど辰巳さんにおっしゃっていただいた、がん検診についても、がん検診という非常にピンポイントのテーマですら、なかなか皆さんに伝わらないというこの悩みがあるのですが、この会などもこれで解決するわけでもないですが、皆さんと共有していく試みの一環としてやらせていただいているのですが、どうしたらメッセージとかこういう考えとか伝わっていくかなど、これについてご意見をいかがですか。

迫田監督は、子どもたちに伝えたいことを伝えるというときに、どれくらい伝わっているなという実感をお持ちですか。

迫田： どういうことでしょうか。

湯崎知事： どんなことでもいいのですが、野球の中で子どもたちに、こうあってほしいとかいろいろなメッセージがあると思うのですが、それを相手にどれくらい伝わっていると思っておりますか。

迫田： これは私メール打ち返すの毎日1時間かかります。もしあれだったら見てもらってもいいくらい。成績が分からないです。全員を見て成績を順番に並べてくださいといったら、これだけ見たら分からないくらい、メールだったら書けるのです。だからこれを使ったらいけないといわれる人もいるけれども絶対必要ですね。

例えば、ものを言うのに手足を動かさないとものが言えないとか、これは駄目ですよ。学校の先生だったら言えないかも分からないですが、私はおまえが偉くなって会社でパッとあれするときに、こんなことをしていたら相手聞かないよ、だからきちんと直しなさいと。おまえが知事になるのだったら、もう少しこうしたほうがいいですよと、県知事になって話をするときに、手をこんなにしていたらできないではないかくらい言いますね。

これは本人を叱るのではなくて、直してやらないといけないということです。

結構今、あれしたらよくないのではないかという言い方をされるけれども、私は本人のためにはプラスになることだと思うから、今、保護者の方に1人でも止めろと言われてたら、私は止めようと思っておりますから、それ以外は自分でやりたいことをやって、私、選手でも甲子園で優勝できて、監督で優勝できているのです。そういう経験を1人でもいいからやってください。甲子園へ行って応援するだけでも違いますということを言いたいのがいちばんで、あまり偉くなるとかなんとかはないですが、やはりこういうことだけは、人間としてはやらなければいけないということは大事にしてやりたいと思っています。あまり偉いことは言っていないです。

湯崎知事： ありがとうございます。

真正面からしっかりと逃げないでメッセージを伝えていくという。かなりお時間を使われていると、やはり繰り返し伝えるということが大事なのかなと今、受け止めましたが、ほかの皆さんもいかがですか。

辰巳さんも県のメッセージが伝わっていなかったということだと思うのですが、がんに関わらず、どう工夫したらそれがより、がんについてはいろいろなご提案をいただきました。

辰 巳： 東国原さんが宮崎県の知事をやられたときに、ものすごいプロモーションをやられて、宮崎県産のものならなんでも売れるみたいな状況になったと思うのです。たぶん宮崎県の方はお喜びになったのだらうという感じで見ていました。

広島県も「おいしい！広島県」というおもしろいキャッチフレーズで頑張られたと思うのですが、毎年変わりますよね、今年は「ミタイケン」とかすべていいのですが、1年ごとにやられていくとなかなか残らないなという部分があって、そういう意味での継続性もあっていいのではないかな、繰り返しではないですが、例えば「もっとおいしい」とかそういう感じで言葉遊びをする。

話はそれなのですが、鳥取か島根行かれた方にお土産をもらったときに、鳥取か島根か分からないけれどもその辺に行ってきました、みたいなお土産をいただいたことがあるのです。大変おもしろいなと自虐ですよ。

広島県は他の中国地方に比べると人口も多いし都市ということで、上から目線になっている可能性も少しあるのですが、そこをあえて自虐的なネタも含めてインパクトある、おもしろいものがあるとグッと引きつけられるものがあるのではないかな。難しいと思うのですが、県の方とか真面目な方が非常に多いと思いますので、少しふざけたことをやると、なかなかそこに変な目で見られたりもあるかなと思うのですが、殻を破るという意味でおもしろい施策をやっていただけたら、また新たな広島県の魅力も増えるのではないかなと考えています。

湯崎知事： ありがとうございます。

インパクトですね、これは我々もなんとかインパクトを出そうと頑張っているところですが、デーモン閣下もそうなのですが、引き続き頑張れということだと。私は東国原さんのようなタレントではないので、あそこまではできないかもしれませんが、私自身も頑張っていきたいと思います。

藤川さんと永福さんも何か、今のどちらでも結構なのですが、メッセージをどう伝えるか、どういうふうに住民の皆様支えたいか、あるいは何か他にあったら、皆さんのお話を聞かれてひと言いただければと思います。藤川さんいかがですか。

藤川： 情報を伝えるという点で、竹原市のほうでも竹原ファンクラブできて、月1回ですがメールが届いてきます。そういうダイレクトに届いてくるメールは、興味を引かれて見ていくのかなと思っているので、まだまだ内容が寂しいファンメールですが、そこからもっと楽しい話題とか体を大事にしようねというメッセージが県から届いてくると、ちゃんと思ってきているのだなと感じられるかもしれない。僕はそう感じます。

湯崎知事： なるほど、ありがとうございます。

個別に届くメッセージをということですね。

ちなみに私という県もいろいろなメッセージ出していると思うのですが、大阪事務所担当が1人、大阪の人向けに広島情報をメールで出しているのです。これは結構マニアックでおもしろくて、これも1つ勉強かなと思ったりするのですが、すごくマニアックな話題が出てくるのですよ、いろいろなトピックでそうなっているので、相当いろいろなことにマニアックだなというのが分かるのです。

永福さん何かいかがですか。

永福： 県議会便りとかそういうものが、何か月かに1回各家庭に届くようになってきていると思うのですが、市の広報、毎月入ってきますが、ネットを使うのも大事なのですが、高齢化社会になってきているので、誌面でアピールするというのが知事便りではないですが、年に1回でもそういうものがあつたら、県知事とか県の方がこういう活動しているというのがより多くの広島県人に伝わっていくのではないかなと思うのです。

湯崎知事： ありがとうございます。

インターネットだと自分が見に行かないと分からないですからね。紙だとお届けすれば、皆さんのところに届いていくと。県民だよりというものもあるのですが、これ3カ月に1回出しているのですが、そこはあなどれない情報媒体であるということで、議会だよりもいかがでしょうか。もっと出してはどうかという。

ありがとうございます。もう時間を過ぎてしましまして申し訳ありません。

今日、本当にそれぞれの皆さんの発表していただいたテーマというのは、誇りだとか人づくりだとか、あるいは地域づくりというところで、我々が今回大事にしたいテーマだなど、それはもちろん安心につながっているなと感じたしだいであります。

そういう意味で、今回のビジョンも良かったなと思っているのですが、引き続きこれが皆さんにご理解をいただけて、共感をいただく努力をしっかりとしまりたいと思

います。

今日は本当に竹原の中で活躍をされていらっしゃる皆さんに来ていただいて、お礼を申し上げたいと思います。

市長、総括的に何かございますか。

今 榮 市 長： 先ほど藤川さんから竹原ファンクラブの話を出していただき、なんで竹原ファンクラブ今更と思っている方いらっしゃると思うのですが、この今更がいいのだと僕思うのです。だから改めてこういう取り組みをしたと、これからもっともっと竹原を元気、そして笑顔がいっぱいの、そして竹原の地が大好きだと、誇らしい町だと思ってもらえる町に皆さんの力を借りてぜひ進めていきたいと再認識ができて、本当に今日はいいい一日だと思います。

湯 崎 知 事： ありがとうございます。

改めて今日はお忙しい中、こうやってお集まりをいただいた皆様、ご意見をいただいた皆様にお礼を申し上げたいと思いますし、今 YouTube で御覧になっている方もたくさんいらっしゃると思いますが、この忙しい時間帯にご参加をいただいて本当にありがとうございます。

今日いただきましたいろいろなご意見、我々もそうだなと思うことも多々ありますので、今後の施策の展開に生かすようにしてまいりたいと思います。

それでは少し時間をオーバーしてしまいましたが、今日の意見交換以上にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

この会の設営とさまざまな実現に竹原市の市長はじめとして竹原市役所の皆さんに大変お世話になりましたので、改めてお礼を申し上げます。

閉会

司 会： 皆さんどうもありがとうございました。それではこれもちまして「ひろしまの未来を語る in 竹原」を終了いたします。

本日はご協力いただきまして誠にありがとうございました。